

(そのとき、イエスは群衆に)神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた。日が傾きかけたので、十二人はそばに来てイエスに言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです。」しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買に行かないかぎり。」というのは、男が五千人ほどいたからである。イエスは弟子たちに、「人々を五十人ぐらいつづ組にして座らせなさい」と言われた。弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。—ルカ 9章—

永遠の命の糧

神さまが、なぜご聖体にならなければならなかったのか？ 旧約から新約聖書に至る、神の「救いの歴史」がそれを語っています。

アブラハムに故郷を捨てさせる旅が始まった、神による「救いの歴史」は、人類の目を、真の故郷に向けさせるように展開していきます。

アブラハムは旅人でした。彼の子孫、エジプトを脱出したイスラエルの民も、荒れ野をさまよう旅人でした。しかし……

旅が命がけだった昔、「可愛い子には旅を」という金言は、「命がけで学んだことは、生涯の教訓になる」という意味がありました。神がわたしたち人類にさせている「人生の旅」はまさに、命がけで学んで身に付けて欲しい教訓があつてのことでしょう。その旅とは、「永遠の命」を得る事の

できる、私たちの本当の故郷に帰る旅であり、この世限りの宝を手に、荒れ野で滅んで逝く旅ではないのです。

しかし、今や現代は、天を突くまでに発達した科学によって、旅は余暇を楽しむ、ひとときの娯楽と化し、目的が、この世限りの宝を手にする「手段」とすり替わってしまっているのです。



情報の画一化と、若者の教会離れ、神離れにみる世界的風潮は、神の「義の杯」を溢れさせることになった、かつての「バベルの塔」を彷彿とさせます。

このような世界にいられた主イエスは、マナを

食べても死ぬ人間の、永遠に死なない食物になるためにご聖体となつてくださったのです。

地球上の90%の生物が、他の生物の餌になるために存在し、人間もウイルスや癌の餌になってその例外ではない中、イエスは「永遠の命」を生きるための人間の餌(ご聖体)となるために来られたと聖書は物語っているのです。

嬉しいことは、今日、香里教会は幾人かの子供たちが、晴れてご聖体をいただきます。

「ご聖体」とは、それを食べるとイエスさまのようになる食べ物です。自分のことよりも「ひと」を大切にする人になり、「ひとの糧」となって、神さまと共に生きる人になる「天からの食べ物」なのです。

2022年 6月19日
主任司祭 昌川信雄